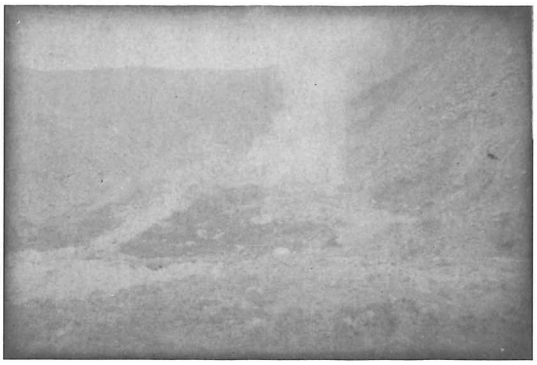


7-8　戸之口十六橋

7-7　噴火口接近北望図

日本の写真教育
―東京高等工業学校・東京美術学校・東京高等工芸学校

森　仁史

東京高等工業学校～東京美術学校

日本の写真教育は大正四年（一九一五）二月二十日東京美術学校（以下、美校）に設置された臨時写真科が嚆矢であることは間違いないが、この学科には前史も異動もあり、変遷は込み入っている。美校に始まりその後長く写真教育に関わったのが鎌田彌壽治（一八八三―一九七七）であるが、彼は明治三十八年（一九〇五）山口高校を卒業し、四十一年京都帝大工科大学製造化学科を卒業した。当時の写真は製版、感光化学と一体の領域であり、鎌田は写真撮影（図1）をしないわけではないが、それは実験的なものであり、基本は化学研究者といってよかった。また、鎌田は『日本写真教育史』（東京写真大学短期大学出版部、昭和五〇年）、「わが邦写真教育の回顧」（『フォトテクネ』第29号、一九七九年三月）など貴重な証言を残している。学科の設立については、すでに『東京藝術大学百年史』東京美術学校篇第二巻（ぎょうせい、平成四年）に詳述されているので、その前後の経緯を記しておきたい。

1　鎌田彌壽治《セルフポートレート》1921年

『百年史』にも述べられている

4　印刷工芸科第二印刷室（『東京高等工芸学校一覧』昭和6年所収）中央奥は岡利亮教授、左に立つのは榎本治郎工場長

5　写真部研究室（同上）

芝浦では大正十五年五月に写真部が発足した。

この時期の教授陣は以下のような構成だった。（＊は東京美術学校卒業生）

教授（写真術第二、三部、材料学、写真化学ほか）　鎌田彌壽治

教授（写真実修、製版及印刷術）　伊東亮次

助教授（写真実修、材料学、化学実験）　長口宮吉（一九二六～）

助教授（写真実修、写真術第二部）　岡＊利亮（一九二七～）

助教授（写真実修、写真術第一部）　畑＊保之

講師（写真術第一部）　近藤　徹

講師（写真実修、写真術第一部）　久米福衛＊（一九二三～）

鎌田、伊東、岡は印刷工芸科と兼任だった。写真術第一部は英語を生徒に読ませ、英文からの知識を与え、第二部は写真光学、第三部はその他を担当していた。このなかで実際に写真作品を制作していたのは久米福衛〔図6〕だけだったのではないか。久米は明治四十年（一九〇七）山口高校から美校西洋画科予備科に入学し、四十二年西洋画科を卒業した変わり種であった。宮崎県立高等女学校、鳥取中学校図画教員を経て、大正八年美校臨時写真科助手に採用され、翌年講師となった。同科では絵画、図案を担当した。美校入学前、明治三十七年から四十年まで白馬会に油彩画を出品し、第一回文展にも入選した。大正二年からは国民美術協会展に出品を重ねていた。写真をメディアとした作品としては現像した印画紙の上に油彩で彩色した安田禄造肖像（一九四一年）〔図7〕が伝わっており、安田校長の退職記念かと思われる。ここには印画紙のセピア色を残して、それ以外の部分に着彩するという技法が用いられ、カラー写真が普及する以前の段階で写真に一層の再現性を実現しようとしたもので、久米が考案し、アート・クロームと名づけていた。

6　久米福衛と写真部卒業生 1933年（後列左から大東元、松島進、吉田公英、小林勇太郎）

7　久米福衛《安田禄造アートクローム肖像》1941年（松戸市教育委員会蔵）

写真部の卒業生は以下の通りである。（）内は選科生

選科生という制度は帝大、美校に設けられていた制度だったが、高

昭和	卒業生
3	6
5	4
6	②7
7	①6
8	①6
9	②6
10	②8
11	①7
12	①7
13	①8
14	①7
15	5
16	8、8
17	10
18	11

等学校でもそれに準じた制度だったようで、学校規則第九章には六条に渡って選科生の規定が設けられ、入学試験を経ずに、入学にも旧制中学卒業でなく尋常小学校卒業以上なら応募資格があり、特定の学科について「工場実修ノ外其科ノ実技ニ関連セル学科目ヲ指定聴講」する制度で、「成績佳良ナル者ニハ修業證書ヲ投与ス」と規定されていた。写真部の選科修了生を見ると、自営やカメラマンとして活動している者も多いので、卒業生と同等の技量を身に着けることができたようである。また、昭和十一年にインドから、十二年にコロンビアから選科生を受け入れている。

この写真部の卒業生を見ると、次のように多くの新聞社カメラマンが目に付く。それ以外でプロカメラマンとなったのは映画会社が多いが、当時の狭い専門業界での先輩後輩の人的関係による就職状況がうかがえるようだ。同様に感光材料メーカーでは、殆どが富士写真フィルムに集中しているのも同じような事情が働いているものと思われる。官庁での仕事は記録撮影の領域での活動だっただろうか。（）は卒業年

新聞社

- 東京朝日新聞　影山光洋（政雄）（1930）、橋本貞（1931）、大木栄一（1932）、金井大治・中井糾夫（1936）、前山堅治（1937）、森田雄治（1938）、貝塚裕・吉岡専造（1939）、岩本忠夫（1940 金沢支局）
- 大阪朝日新聞社　森田亜雄（1931）、大束元（1933）、岩本忠夫（1940）
- 東京日日　阿部徹雄（1936 印刷工芸科卒）

映画

- 日活　松島進（1933）
- 東宝映画　岩淵喜一（1932）、内藤省三（1933）、岸次郎（1935）、岸上（森）元雄（1938）、小林利央（1937）
- 満洲映画　曾山直盛（1936）
- 朝日映画　青山巌（1938）、安達稔（1939）

官庁

- 陸軍　及部夏雄（1928）、鈴木久（1932）、大本士行（1934）
- 文部省社会局　斎藤宗武（1928）
- 同宗務局　田中和眞（1934）
- 工芸指導所　臼井正夫（1935）

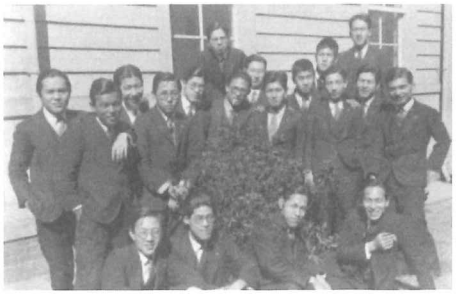
建築写真　池田三四郎・平山忠治（1932）

増島得男『新聞写真の研究』（朝日新聞調査研究報告社内用34、一九五二年）は貴重な調査報告だが、伴俊彦『新聞の写真』（同文館、昭和30年）と歴史記述の主要部分がほぼ同一なので、あるいは同一著者なのかもしれない。これらによると、写真印画を活版輪転機で印刷する技術は明治三十六年二月欧米を視察した藤村雄二が輪転用ステロを考案し、日本新聞社で成功させ、三十六年伊藤昇が京橋に設立した日本製版社は『都新聞』、『読売新聞』などの製版を請け負った。三十八年九月に『時事新報』が電車焼打ち事件の報道に初めて自社撮影の写真を掲載した。四十五年四月東京朝日新聞社の木村梅次郎、間淵保蔵が写真銅板から紙型をとることに成功し、特許を取得した。

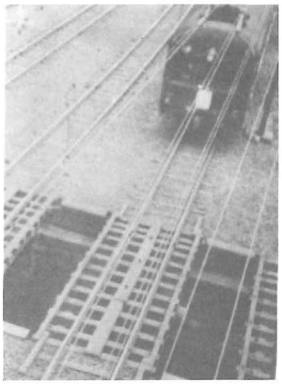
大正期には明治製版、辻村製販が自社のカメラマンが撮影して製版した写真を新聞社に売るようになり、これが最初の報道カメラマンであった。こうした写真重用の流れは人々が現地映像として画家の描いた挿画よりも写真図版の方により一層のリアリティを感じるようにな

8　京都都ホテルにて中学生の提灯行列に答へられる秩父宮堂妃殿下（東京朝日新聞 昭和三年十月二十一日）

ったという変化がもたらしたものであった。こうして写真報道が読者大衆に訴える力が大きいことがはっきりし、部数拡大につながったので、新聞社も専属カメラマンと製版技術者を置くようになった。昭和八年十月二十一日、朝日新聞社はジーメンス・ハルケス社製の電送装置をシベリア経由で搬送し、翌月の天皇即位式典に備え京都皇宮前出張所に設置したと報じ、最初の電送写真〔図8〕を掲載した。電話線によって鮮明な画像を送受信ができるので、「国民に感激を深からしめ得る」と誇った。こうした需要のたかまりのなかで、東京朝日新聞社は昭和三年十一月、大阪朝日新聞は翌年九月に独立した写真部を創設した。これには新聞社が使用するカメラが大型の暗箱カメラからミニマム・パルモス（一九〇四年発売）のような手持ち可能な小型カメラに切り替わり、カメラマンの機動性が大幅に上昇したことが貢献していた。また、アーク灯、マグネシウム閃光が夜間撮影を可能として、報道できる範囲が大幅に広がったという事情が寄与していた。



9　写真部学生　1930年（左端平山、最後列左岩淵、右池田、前列左から二人目影山、右端大東）



11　金井大治《動き》1934年（『TECHNE』XOL.12, NO.6所収）

10　前山堅治《静物習作》1935年（ゴム印画）

同じ四回卒業生〔図9〕に建築写真で活動したのが池田と平山だが、『国際建築』、『新建築』、『住宅と建築』などを活動の舞台とし、一九三〇年代日本の最先端であったインターナショナルスタイルの建物を撮影している。池田は入学前に蔵田周忠と知り合い、彼の勧めで専門家の育っていない建築写真家になることを決めたという。（本誌第二号を参照）

彼らは学校でそれまでに登場した様々な印画技法〔図10〕を学ぶように求められたし、その応用技術も学んだに違いない。しかし、写真は時あたかも明治末に絵画的であろうとしたピクトリアリズムの時代から、工業化、都市化の進む社会の風潮にマッチした新即物主義的な作風に移行する時代であってみれば、写真部学生はそうした新しい動きに影響されないではいられなかった〔図11〕。これは正確な対象把握を求める写真報道にはうってつけの作画法だった。

鎌田の回想で印象的なのは、美校写真科時代から毎週一回一時間生徒先生が一堂に集まって雑誌講読会を開き、順番に強制的に発表させたことである。「この目的は生徒に多国語を習はし、新知識を採り入れさせ、かつ公衆の面前で話を練習をさすのが主なる目的で、結果が非常に良かったから、写真科や製版科が芝浦に移管した後も、長い間こ

の講読会を続けていった。」と語っており、例えば、大正五年三月八日の内容は次のようなものだった。

一、アルビューメントについて　写真科　山本達雄
一、オイルプリント　製版科　坂井光義
一、印刷室の寒気を如何にして防ぐか　製版科　岩月宗次
一、新案二件　同　伊藤修治
一、輓近化学工業の進歩　教授　鎌田彌壽治

欧米諸国と技術研究水準において大きな格差がある日本にとっては、最新情報やそれに基づく実践は海外の雑誌や刊行物から学ぶのが常套であり、高等教育機関卒業生に求められるもっとも重要な使命だった。学生たちはその手法や現場感覚をこうした機会を通じて学び、身につけていったものと思われる。

こうした学生間の親密な関係のゆえだろうか、昭和七年工芸写真会が結成され、孔版刷の『会報』〔図12〕が発行されている。手元の第十五号（一九四〇年）までは発行が確認できる。池田と平山は在校中から注目される存在だったらしく、十時川恍の寄稿は二人の在学時の姿を彷彿とさせるものである。

彼氏〔池田〕は信州の産、顔は長く殊にひたひの広く、髪を太く無造作にかき上げたる様、三文文士をホウフツたらしむるの観がある。時に人生を論じ、時に文学を講じ、時に独特の写真観を以て下級生に君臨する時、彼氏の眼光とみに輝き、トウトウとして論ずるところ、盡きんとするも盡きざるが如しである。…

次に平山忠治氏。を起さう。

彼氏の風貌又芸術家的にして朝に夕に、日比谷を過ぎて虎ノ門アパートをくゞるものは、そこの一角にいともかそけきヴイオリンの音のロウ〳〵として騒音美となりて聞こゆるを注意せられ度い。こゝに諸君は偉大なるギアングの手下を想像せられれば可である。

彼氏工芸写真会創設に当たつては、鈴木久氏と共に奔走、研究、以て堂々たる事務的手腕を著し、斯界に輝けるは高芸生活中最も「華かなりし頃」であつたらうと思ふ。

池田は一九四〇年代に印刷工芸科の先輩に依頼されて、『新武道』の編集に関わることになり、その表紙に池田の写真〔図13〕が用いられただけでなく、本文には平山に「ドイツ電撃戦の秘密」を執筆させ、工芸図案科卒だった親友の山下謙一に表紙〔図14〕を依頼してもおり、卒業後も続いた同窓生の親密な関係が窺える。

池田は後年「写真は物を写真を通して伝えるための媒体、メディアであり、あくまでもその客観の中で正しく発注者の意見を尊重して、自分としては自分の持つあらゆる技術

12　『工芸写真会会報』
第1号、昭和7年5月
（表紙版画は大東元）

13　池田三四郎『新武道』
第1巻第3号、
昭和16年3月

14　山下謙一『新武道』
第3巻第4号、
昭和18年4月

を駆使して、その使命を果たすことであり、それが建築写真家に与えられた役割であると考えていた。」と述べ、「主観的な芸術写真と同じ立場で働いて、なお自分の作品が建築設計者または雑誌社を全部満足させるところまでいかなければならない。」（池田三四郎『松本民芸家具への道』沖積舎、平成二年）と撮影対象をとらえるカメラマンのプロ意識を客観的に語っている。カメラマンに求められるのは自己が満足できる映像表現を達成することだけでなく、その技量と社会的、商業的要請との接点と見出し、実践していくことなのだと的確に把握している。この時期のカメラマンには写真の技術的完成よりも、そこに時代が求める方向までをも映像化することが求められ、それを実践することが必要となっていた。そのうえで、自らの写真家の立場を築くのであり、これこそが近代的な意味での写真家の表現のありようとなっていった。高等工芸写真部の教育はこうした時代の開拓者を生むことに成功したように思える。

＊　＊　＊

東京高等工芸学校は戦時体制のもと、昭和十九年四月東京工業専門学校に改組され、写真部は印刷工業科写真部に改められ、さらに翌年四月に写真工業学部となった。これは昭和二十四年新制大学発足時に千葉大学工芸学部四類化学・印刷・写真系として引き継がれたが、二十六年四月に工学部に改組されたとき、工業化学科（20）のなかの写真映画専攻となった。三十三年には写真印刷工学科（写真映画30、印刷20）に再編され、三十七年に写真工学科（40）と映画工学科とに分離された。ここには戦後復興の求めの増大につれて、写真の技術研究、人材養成が急速に拡充されていった足跡が表わされている。

山田俊幸『一寸』執筆一覧

山田氏が十一月三日に亡くなられた。七十七歳であった。大分以前のこと、「余命五年だと宣告されたよ」と、他人事のように言っていたのが今では懐かしい。同人は「余命五年もあるのか」と冷やかし、それから五年が過ぎ、それからでも何年が過ぎたことだろう。同人たちは会うごとに「あれ、五年過ぎても元気じゃないか」と皮肉ったことだった。それもまた同人一流の挨拶でもあった。

亡くなる間際まで古書会館の古書展に、同人と一歩時間をずらして通ってこられた。神保町をこよなく愛し、最後まで収書に執着し、郡山市立美術館で氏の監修になる『大正イマジュリィの世界』（九月七日―十月二十七日）が開催され、講演もされたと聞く。山田氏が力を入れていた「大正イマジュリィ」が、最後の仕事となったのもまた縁であろうか。寂しさと同時にご冥福を祈りたい。

本誌の構成は、五十音順からなっている。青木から始まり山田で終わる起承転結の文章の流れは、まことに絶妙であったと編集子は思っている。本誌八十七号で山田氏は青木さんの逝去を

十一月×日　巨星墜つ

青木茂さんがなくなったと森登さんから電話。つい数日前、「慶賀、慶賀」と書いたばかりだった。著名人の死に際し、巨星墜つ、と評するが、あらためて青木さんの死は、まことに「知られざる知の巨星墜つ」だろう。

一寸

第九十九号　二〇二四年十二月

第九十九号目次

『風俗画報』初期の印刷と画家　岩切信一郎　1
時に抗いし者たち——私の小菩薩峠（53）　大谷　芳久　10
関東大震災・朝鮮人虐殺への道（3）
大正・昭和戦前期中等学校の図画教員29　金子　一夫　36
京都府1
原撫松の日記　XII　丹尾　安典　54
一九一一（明治四十四）年二月～十月
田中智学と「磐梯山噴火」図版　森　登　74
銅・石版画遺聞96
日本の写真教育　森　仁史　85
—東京高等工業学校・東京美術学校・
東京高等工芸学校
山田俊幸『一寸』執筆一覧　92

『風俗画報』初期の印刷と画家

岩切信一郎

久しぶりに『風俗画報』を通観したのは、令和三年の秋であった。目的は「坂巻耕漁」について、『風俗画報』にほぼ連載していた巻頭「能画」を調べることであった。その頃、非常勤で教えていた國學院大学の図書館所蔵本を披見した。しかし、図書館製本の合本で、欠落号あり、破れた図版、頁の欠落等があり、その欠を復刻本、CD-ROM版で補うことにした。それでようやく通観することができた。通して見ると感ずることあって、特に印刷については、単に「石版雑誌」とは言われてはいるものの、木版、銅版、石版など実に製版に苦労した様子が見て取れて興味深かった。そうは思いつつもゆっくり眺めている暇などなく坂巻（月岡）耕漁の画像情報を掻き集めるだけで調査は終了したのだった。

調査したのは、那珂川町馬頭広重美術館での企画展で『能画家・耕漁—揺らめく煌く能の世界—』展（令和四年二月）が開催されることになって担当の長井裕子さんから声がかかっていた。長井さんには、もう二十年前くらいに「坂巻耕漁」の存在について熱い思いを語ったことがあって、それを律儀に覚えて居て下さって展覧会企画に及んだ。そこで、私は久しぶりに『風俗画報』を通観し、結果として展覧会の図録に「耕漁考—能画・『風俗画報』と共に—」と題して掲載することが